



TOBU

NO. 57

1986年6月

百万石蝶談会

目 次

松井正人: ムモンアカシジミの新産地を求めて	2
松井正人: ギフチョウ雌の吸水行動	3
松井正人: 越年葉に食い付いたギフチョウ	4
松井正人: ミスジチョウを採幼	4
松井正人: 四国・カンアオイ探しとクロコノマ	4
野中 勝: オサムシコーナー 4. オサムシ余話	6
野中 勝: 金沢市国見山でサビナカボソタマムシを採集	7
野中 勝: ゴミムシダマシ科2種の記録	8
松井正人: ギフだらけ	8
M. NONAKA: セント・ルイスからの第一報	8
山本直樹: Self introduction	9
編集部: 会員の動き・しゃばの動き	10
編集部: 例会の記録 (1986年4月4日の記録)	12

ムモンアカシジミの新産地を求めて

松井 正人

ムモンアカシジミの幼虫には全齢期を通じてアリがつきまとい、発生木にはゾロゾロとアリが往来している。このアリを目印にしてムモンアカシジミの新産地が発見できないだろうか。アリを目印に捜すことができれば、何も夏の暑い盛りにウロウロ捜しまわることもなく、春の涼しい間に捜し出し、夏本番ではエアコンのきいた車から降り立つや、軽くつなぎ竿を振り回し、成虫を確認すると直ぐまたエアコンのきいた車で、涼しげに次ぎのポイントへ移れるのである。こんな甘い考えから1985年は、アリゾロ(アリがゾロゾロ上下する木)の調査に入った。

《調査法》

1984年に発見された、白峰村(1、2)、尾口村(2)の産地には次ぎの様な似通った点があった。

1. 発生木は林道わきにあり、独立あるいはそれに近い状態にある。
2. 発生木は総てミズナラである。
3. 往来するアリは同一種らしい。

そこで調査は、

目星をつけた林道を車で走り、独立あるいはそれに近い状態にあるミズナラを捜し、それらしい木があると車を降りてアリの有無を調べることとした。

《調査》

5月12日

白峰村大杉谷(1)の発生地でくだんのアリと幼虫をしっかりと目に焼き付けて、調査に移った。

尾口村東二口より白抜山へ至る林道では、独立状態に近いミズナラを20～30本見付けたがアリゾロは2本だけだった。しかしこの2本からは、幼虫は確認出来なかった。

吉野谷村佐良から笠山へ向かう林道にはアリゾロは1本も無かった。

5月26日

尾口村一里野より新岩間温泉を通り丸石谷へ抜ける林道では、3本のミズナラと1本のコナラのアリゾロを発見した。ところが2本のミズナラは大きすぎて全く幼虫は捜せず、残るミズナラ1本とコナラでは幼虫は確認できなかった。

一里野白山ドライブイン付近より、発電所導水管に至る林道にもアリゾロは1本も無かった。

白峰村百合谷林道(2)の発生地で幼虫を捜したところ、フ化殻は確認出来たものの幼虫の確認は出来なかった。

6月9日

白峰村白峰より谷峠へ至る国道157号線より枝分かれする林道5線について調査したがアリゾロは1本も無かった。

7月28日

尾口村目附谷(2)の発生地にて成虫の発生を確認後、アリゾロ6ポイントの調査を行ったが、白抜山2ポイント、一里野付近4ポイントすべてにムモンアカシジミは見られなかった。

8月4日

再度一里野付近4ポイントを調査したが、やはりムモンアカシジミは見られなかった。

《まとめ》

吉野谷村、尾口村、白峰村において9本の林道(林の中の道)を調査し、アリゾロ(アリがゾロゾロ上下している木)を白抜山で1箇所2本、一里野付近で2箇所4本(ミズナラ3本、コナラ1本)を発見した。ところがどのアリゾロにおいても幼虫、成虫共に確認することは出来なかった。

5月26日に行った発生地百合谷林道での調査の結果から“ある齢期以上の幼虫の発見は極めて困難である”と、かってに思い込み、2回の成虫調査も行ったが結局は期待はずれであった。

案をしてムモンアカシジミの新産地を見付けようとした甘い夢は、途中結果が出ているにもかかわらず、夢にすがりついて成虫調査に及んだあげく、完全に破れ去った。しかし、ムモンアカシジミの発生木は確かに独立木に近い状態でアリがゾロゾロ上下しているので、この方法でもっとアリゾロを捜し出せば、そのうち発生木にぶつかるはずである。今回はたったの6本しか発見出来なかった為に、発生木に当たらなかったものと思われるので、更に捜し出す事によってきっと発生木は見付かるはずである。そのために皆さんもどしどしアリゾロを発見して下さい。きっとその中に発生木が有るはずです!

文 (1) 松田俊郎(1984) 翔 48

献 (2) 松井正人(1984) 翔 48

ギフチョウ雌の吸水行動

松井正人

1986年5月8日、金沢市二俣にて目撃したものである。かなり飛び古したギフチョウ雌が、まるでカンアオイでも探しているかのように地上低く飛んでいたかと思うと、フワフワと水たまりの横に舞い降り、ただちに吸水を開始した。翅は180°以上(地面にベタッと着く様に)広げたまま羽ばたかず、腹も全く動かさず、ポンピングも見られなかった。14時56分から58分にかけてただひたすらに吸い続けたあげく、重そうにゆっくり舞い上がり、ゆっくりと上昇しながら付近のコナラの5m位の所に止まった。その後は動かなかった。この地は、4月中頃よりギフチョウが発生しており、辺りにはヒメカンアオイもたくさん見られる事から、産卵途中の個体だったものと思われる。

この日は快晴でさらにフェーン現象の結果から、日中の最高気温29℃を記録しているので、ギフチョウも暑さにたまりかねたのだろうか?

越年葉に食い付いたギフチョウ

松井正人

1986年5月13日金沢市栃尾(標高260m)にて、ヒメカンアオイの越年葉に食い付いているギフチョウの1令幼虫1exを発見した。この越年葉にはフ化殻が10コあったので付近を捜してみると、同じ株から伸びている新葉に7exsかたまって食い付いているのが見つかった。この株には他にフ化殻が無いことから、越年葉に食い付けなかった幼虫だと思われる。

多雪地域において、雪解けの関係からやむ無く越年葉に産卵された場合、フ化した幼虫は越年葉に食い付けず、付近の新葉を捜して食い付くと思っていたが、中には平然と越年葉に食い付く図太い幼虫もいたのである。

ミスジチョウを採幼

松井正人

1986年4月20日白峰村大道谷にてミスジチョウの幼虫を採集したので報告する。県内で本種の幼虫が採集された記録は極めて少ないと思われ、筆者は金沢市倉ヶ岳(諸道秀人、1980)、吉野谷村雄谷(松井正人、未発表)の2例しか知らない。

採集したのは小さな谷で、谷底にはまだ一面に残雪があり、北側斜面にも一部雪が残っていた。残雪の上を歩きながら、カエデの枝先に付いている枯れ葉の越冬巣を探し、2本のコハウチワカエデより、各1頭ずつ採集した。この2本のカエデはいずれも残雪の縁から立っていて、辺りのカエデと比べるとやや太めで直径15cm位の木だった。

豪雪地帯の採幼は、雪に埋まったり雪圧で倒れるようなカエデでは、雪圧によって越冬巣がもぎ取られていると思われるので、雪圧の影響を受けないカエデを探す必要がある。

データ - 白峰村大道谷 2幼 1986年4月20日 松井正人

文献 諸道秀人(1980) 翔16 p.6

四国・カンアオイ探しとクロコノマ

松井正人

佐川町の朝は遅く、6時半頃よりだんだん明るくなってきた。11月10日この日もまた快晴であった。カンアオイを探してまだ朝露に濡れている下草を踏み分け、下草の無い薄暗い杉林に踏み込むと、何かがフワッと飛びたち何処かに止まった。気にせず進むと、また黒いヤツがフワッと飛び上がり何処かに止まった。何だろうと思いながら止まった方へ行き、フワッと舞い上がった所を素早くネットするとクロコノマだった。前翅端の尖った秋型で新鮮な個体だった。初めてネットに入れた蝶だったので、すこぶる気分は高揚したが、残念な事に目的のカンアオイは見付からなかった。

場所を変えてカンアオイを探すけれども、何処へ行ってもカンアオイは見付からず、代わりにクロコノマがフワッと現れる。どの個体も新鮮でカンアオイ探しを忘れる程に飛び出すのだった。カンアオイが見付からないまま、国道33号を高知へ向けて走っていると、左手に原生林の様な青々とした照葉樹林が見えた。カンアオイが有りそうなので行ってみると、そこは神社林で素晴らしい照葉樹林が広がっていた。ところがこの素晴らしい林に入るには、有刺鉄線をくぐり、砂防えん堤を越え、小川を渡り、ヤブを越えなければならなかった。小川までは難無くたどり着いたが、最後のヤブが大変でちょっとやそっとでは突破できそうにない。10m 彼方にはカンアオイが待っているかと思うと、気が急いで闇雲に体をつっこむが、背丈以上のヤブはナタやカマが無くてはどうしようもなかった。悩みに悩んだあげく、カンアオイは無かった事になってしまった。後髪を引かれる思いで車まで戻ってくると、ジャージーのズボンにはたくさんのひっつき虫が付いている。棒状、半円状から見たことの無い様な物まで、種々多様なひっつき虫が付いている。ムシヤクシャしながら取っていると、目の前の木漏れ日にチラチラと影が動いている。顔を上げると小さな蝶が小枝の先に止まろうとしているではないか。ザックの中からせわしげにネットを取り出し、採ってみるとムラサキシジミ。これを三角紙に包んでいると、また飛んできた。今度のはちょっと大きいぞとネットするとムラサキツバメだった。これも初ネットである。同じ場所でひっつき虫を採りながらムラサキシジミ 2 exs、ムラサキツバメ 5 exsを簡単に採ってしまった。地図からはここが伊野町北浦だとわかった。その後もカンアオイを探しながら鏡村宗安寺の雑木林に入った所、クロコノマのポイントにでもぶつかったのか、たくさんのクロコノマが次から次へと飛び出してきた。この雑木林は明るく、林床にはススキが株を作っていた。ここでネットを振りかざしながら林内をダッシュし、クロコノマを振り逃がすといった光景を、折しもピクニックに着ていた父娘に見られてしまった。父親はびっくりした顔で振り向き異様な眼差しをむけたので、そのままダッシュして通りすぎた。父娘はなかなかそこから動いてくれないので近寄れなかったが、去った後に行ってみてもクロコノマはいなかった。結局ここでもカンアオイは見付からなかったで、この付近のカンアオイ(サカワサイシン)はあきらめて、明日の採集地の室戸岬へ向かう事にした。

途中時間が有ったので、こりずに安芸市で再びカンアオイ探しをしたところ、6箇所めでやっと見付けることができた。たぶんナンカイアオイだろう。ここを出発する頃は既に薄暗くなっていて、手を洗おうと谷川へ下りるとクロコノマが2頭飛び出し、何処かへ飛んで行った。そういえば、この日はカンアオイ探しをしながら、たかさのクロコノマに会えたしまた採集もできた。これは全くラッキー以外の何者でも無いと一人でほくそ笑んでいたものだが、もしかするとクロコノマは何処にでも居たのかも知れない・・・

さあ、明日はいよいよ室戸岬だ。ヤクシマルリシジミやサツマシジミは採集できるだろうか。はたまたトサノアオイは見付かるだろうか。期待と不安とアルコールに酔い痴れて、寝心地の悪い車の中で深い眠りにつこうとするのだった。

(1)SNとHS

おじさんたちは病気なのである。本人達の名誉の為に、ここでは特に名を伏せてSNとHSというイニシャルで呼ぶことにしよう。もっとも会員名簿を見ると、これらのイニシャルに相当する人がそれぞれ一人づつしかなくて、SNが中西重雄氏で、HSが澤田博氏だとバレてしまったとしても、そんなことは筆者は知らない。とにかく二人の病状を見てみよう。1985年3月に発病したSNは、発病と同時にマイマイカブリを大量採集、以後採集に行けば必ずと言って良い程マイマイを採ってくる。この人は日曜日になれば、雨が降ろうが嵐が来ようが必ずと言って良い程採集に出掛ける。従って、三段論法により毎週確実にマイマイの標本を増やしているのである。発病前は蝶屋であったはずだが、発病して2~3ヶ月後にはせっかく採ってきたコヒオドシの幼虫をマイマイの餌に使うという入れ込み様。一般の人はオサ掘りにピックルを用いるのであるが、SNは特製のツルハシを振り回す。あなたが腕自慢なら並んで崖を崩してみると良いが、あなたが掌一杯分の土を崩す間に敵はトラック一杯分の土砂をかき落とすだろうから、初めから勝ち目は全く無い。巷には筆者がSNを無理やりオサの道に引きづりこんだという邪説を唱える者もいる様だが、現在のSNの狂い様をみれば、この人は根っからオサムシが好きだったとしか考え様がない。余りに重症な為、もう治る見込みは無いのではないかという悲観的な見方をする人もいる様だが、筆者の見るところでは、あと2年程で全快するはずである。なぜなら2年間でSNは石川県の崖という崖を総て崩してしまい、その結果石川県は平坦になって、もはややる事が無くなるのである。

もう一人、HSの発病はずっと遅く1985年12月。客観的に見ればSNの性悪ウイルスが感染した様に見えるが、本人の弁によればもともと持っていた病気が約10年の潜伏期の後に再び悪化しただけのことらしい。この人のオサムシグループに対する貢献の最たるものは、正常な筆者はもとより病気のSNさえ真剣には考えていなかった積雪時のオサ掘りというバカげた採集形態を導入したことであろう。常識的には雪が1mも積もれば掘る所など無くなりそうだが、実際に車を走らせてキョロキョロと黒いものを探しながら行くと、けっこう背の高い崖の一部とか、マツの立枯とかが目に入ってくる。当然そんな所はオサ掘りに適しているとは限らず、収穫も常連3種(マイマイ、クロナガ、アキタクロナガ)だけということが多いのだが、日曜日を一日つぶしてビショヌレになって、わずかばかりのオサムシを手にして病気のHSとSNは大満足なのである。気の毒なのはそうまでしてオサムシを採りたいとは思わないのに、無理やり一緒に連れていかれる筆者である。更に松井編集長にいたっては、昨年まで山スキー採卵に付き合ってくれた相棒が居なくなって、ひたすらコタツで丸くなっていたというから波紋は意外に広がっているようである。それはともかく、最近春になってからHSと出掛けると、「どうも雪が無いと調子が出ない」

などとウソぶいて、この人の病気も相当なものである。SNが採れる面白さからオサ道にのめり込んで行ったのに対して、HSはマイマイが採れない悔しさから深みにはまった感があり、現在もマイマイ連敗記録を更新中で、一部に「採らずのヒロシ」などという陰口も聞かれる。採集はともかく標本を見せたらなかなかうるさく、今も内灘のクロナガは他とかなり違っていると鋭意研究中である。

(2) バナイ計画とコプトラ計画

病気のおじさん二人と健康なおじさんである筆者の3名からなるオサムシグループには現在二つの計画がある。その一つはバナイ計画。今や百万石蝶談会の蝶グループの低迷ぶりは著しく、休日もやる事がなくて家でゴロゴロしているという体たらくである。それにひきかえ我がオサムシグループの活躍は目覚ましく、日に日に新知見が集積されて行くので、この際「翔」にオサ関係の記事をドサッと投稿して、オサムシ特集号にしまえ。そうしたら「翔」というのは少しおかしいので、誌名も「翔バナイ」にしまえというのが計画の概要である。コラッ！ 蝶屋ども！ 少しは頑張らんかい！ そうしたら誌名も「少しは翔ぶ」位で手を打ってあげてもいいよ。

ダマスターの亜種であるコプトラプラス(カブリモドキ)とアコプトラプラス(クビナガオサムシ=オオルリオサの仲間)は世界のオサムシの中でも最も魅力的なグループとあって良いだろう。日本には種類の少ないこの仲間を、朝鮮半島、中国大陸に入って採集しようというのがコプトラ計画である。3年後に韓国で、10年後に中国の奥地でトラップをかけることを目標にしている。計画の原点は「オサ屋である以上、中国のカブリモドキを自らの手で採集するまでは死ねない」というところにある。現在の状況では中国での採集はまず不可能の様だが、どんなことでも10年がかりで真剣に準備を進めれば実現できるかもしれない。情報、金銭などあらゆる面の援助を歓迎するし、もしあなたに「やる気」が有るなら計画に加わってくれてもいいですよ。

金沢市国見山でサビナカボソタマムシを採集

野 中 勝

サビナカボソタマムシ *Coraebus ishiharai* Y.KUROSAWA は稀な種(1~3)又は稀とされていた種(4)である。石川県からは過去に金沢市天池坂から記録されている様であるが(2、3)、ムモンアカシジミ探索中に下記の如く本種を採集したので報告しておく。

1 ♀ 金沢市国見山 1985年8月15日 野中 勝採集

文 献

- (1)原色日本昆虫図鑑(Ⅲ)(1985) 保育社
- (2)藤田 宏(1980) 月刊むし 110 36
- (3)関 章弘(1982) 月刊むし 132 34
- (4)小林信之(1984) 月刊むし 166 29

ゴミムシダマシ科 2種の記録

野 中 勝

石川県からは記録が無いと思われる下記の2種を採集しているので報告する。

1) ルリゴミムシダマシ *Encyalesthus violaceipennis* Marseul

1986年 2月16日 lex 河北郡津幡町吉倉 野中 勝 採集

1986年 2月23日 lex 加賀市加佐岬 野中 勝 採集

共にマツの立枯樹皮下より採集した。

2) オオユミアシゴミムシダマシ *Promethis insomnis* Lewis

1984年 6月30日 lex 石川郡白峰村市ノ瀬 野中 勝 採集

燈火に来たものである。

ギフだらけ

松 井 正 人

4月やっと雪の中から解放される。雪解けと同時に春の舞姫ギフチョウが飛び出す。出初めはやっとギフが飛び出したかなどと、待ち焦がれていたかの様に眺めている。そのうち山間地ならほとんど何処でも飛ぶようになり、だんだん数も増えボロも交ざってくると、もううんざりする。

そんな僕でもやっぱりギフは飼育している。県外の奴だが、この食草集めでまた頭にくることがある。ヒメカンアオイなら何処にでもあるはずなのに、何処へ行っても数枚と摘まないうちに必ず卵の付いている葉を摘んでしまう。こうならないように、摘む時はまず葉裏を確かめなければならぬし、運悪く卵にぶつかるとその付近の葉は摘めないで、たくさんあるはずの食草がなかなか集まらない。ほんとうに何処へ行ってもギフだらけで困ってしまう。

セント・ルイスからの第一報

M. NONAKA
7154 Vernon
st. Louis, MO 63130
U. S. A

そろそろホソヒメの集団越冬を掘り出して、つくだ煮をこしらえている頃と思います。こちらセント・ルイスに着いて早3週間が過ぎ、アパート、車、最小限の家具などが一通りそろって、やっと落ち着いたところです。心配していたまわりの植生は、トウモロコシ畑でも草原でもなく、完全な広葉樹林でした。しかも日本と違って人家の周辺の樹も切らずに残してあるため、アパートを一步出ると Elm(ハルニレ類)や Oak(ナラ類)の大木があり、早朝にはリスやウサギが走り回っています。蝶もアパートの窓から5~6種類は見ましたし(恥ずかしいのでアパートの前ではネットは振っていません)、オサムシのトラップなど何処にかけても入りそうです。こちらは着いた時(4月7日)にモモ、スモモ、ハナミズキetcの春の樹の花のpeakで、金沢よりはかなり春が早い感じなので、そろそろトラップもかけようと思っています。気温は寒暖の差が激しく、前日

0℃まで下がったかと思うと、翌日はmaxが30℃を越えるといった具合です。4月26日(土)に初めて郊外へ出掛け、車で30分(と言ってももち論ハイウェイなので50km位)の所にある公園でネットを振りました。この日も30℃を越えたクソ暑い日で、充と二人で1時間たらずぶらぶらして汗だくになりながら8種類の蝶を採集しました。とりわけ美しいものもありませんでしたが、ユキワリツマキチョウ風の *Anthocharis*(ツマキ型で先端がベタッとオレンジ)、見るからに *Papilio* ではない黒いアゲハ、シータテハの裏の♂が、♂になっている question mark と呼ばれるタテハ等、結構見ているとおもしろいものもありました。但し、どれも少し傷んでいる感じで、春一番の蝶にはやや時期遅れの様でした。そのうち美しいものが採れたら送ります。カミキリはすでにカエデの花が終わっており、又その他に目に付く花も見付からず、全く採集出来ませんでした。ハンミョウはグリーンのととても美しいものを採集禁止と明記してある植物園で沢山見ましたので、その内採れると思います。(金子先生にハンミョウを頼まれていますので、楽しみに待っている様伝えてください。)本屋で蛾の小さな図鑑を見付けたら *Cathocala*が沢山図示されており、しかも大部分がセント・ルイス周辺にも分布している様なのでうれしくなっていました。どうもここで一番面白いのはカトカラの様です。

治安も心配していた程ではなく、アパートの周辺は夜歩いても構わない様です。但し下町には本当に恐ろしい所もある様で、ミシシッピー川の東限のEast St.Louisと呼ばれる所では、殺人事件がよく起きるそうで、もし車で事故を起こしても警察が来るまでは決して車の外へ出てはいけないと教えられました。我々が住んでいる所を含めて、住宅地の美しさは日本では想像出来ない程で、各々の家が樹の生えた庭をもっていて、まるで夢の様です。又、生活面では、牛肉、ガソリンなどが、それぞれ日本の数分の1の価格で、納豆はじめ日本食料品も手に入り、日本にいるよりは暮らし易い様です。充も先週から幼稚園に通い始めましたが、一言も英語が分からないにもかかわらず、毎日楽しんでいる様子です。いずれ落ち着きましたら詳しいムシの話(or翔の原稿)など書きます。会員の皆様に宜しく。Telは 341-725-7091 です。

Self introduction

山本直樹

自宅 画920 金沢市入江2丁目259番地 ☎ 0762-92-1509

血液型 A型 昭和35年生まれ 会社員

東京生まれの大阪(茨木市)育ち、実家は奈良。蝶を主体にやっていますが、昨年よりムラサキシタバを採りたくて蛾も始めました。学生時代からフィリピン(パラワン)、タイへ行き、東南アジアファンになりました。国内は春先しか採集に行ってません。今年はミヤマモンキ、ヤマキが欲しいと思っています。

展翅が嫌いで、旅行と宴会が好きな独身です。御指導下さい。尚、電話は朝8時までにしてください。

会員の動き・しゃぼの動き

★あなたの展翅期間はどれ位ですか。長ければ長い程良い訳ですが、一般的には1～3ヶ月といったところでしょう。ところが松井氏の展翅期間は異常に長く、7～11ヶ月らしい。中には3年物もあるらしいが、ここまでくると虫に食われるのを待っているようなものです。

★4月5日松井氏、立山弥陀ヶ原にて旧友と山スキーを楽しんだらしい。ケーブルの終点から歩いて登ったとかで、途中の素晴らしいブナ林ではフジミドリも見る事ができたらしい。

★埋め立て跡地の井村会長宅は、湿気がすごい事で有名である。それは標本箱の中で、標本にカビが生える事で容易にうなづける。このムシ屋にとって最大の敵とも言うべき湿気が、今回ムシ屋を助けたのである。つまりズボラ飼育のあげく部屋の隅にほったらかしてあったギフチョウが、次々と羽化しだしたのである。それもイエローバンドがである。これは明らかに高湿度マイホームなるがゆえの事であろう。

★4月9日山岸氏、武生市日野山へギフチョウの調査。スライドをバッチンバッチン撮ったらしい。

★4月12日小学校教諭の田中先生、生徒の愛虫啓蒙に余念が無い。この日も愛車スバルサンバー4WDに教え子を乗せ、平栗方面を走り回っていた。同日松井氏は二俣へ、中西、勝海コンビは辰口方面へ、それぞれギフチョウの調査。

★4月13日京都の草川氏ら4名、金沢へギフの採集に訪れる。中西一家と松井氏が案内し、大いに楽しんでもらった。皆さんタフで一日中走り回っていたらしい。

★4月15日東北の横山氏、ギフチョウをいままでに2ヶタ採集したことが無いとかで、張り切って最盛期の金沢へやってきた。ところがどうしたことか前日までの快晴とうって変わっての雨。どうも黄色いしましま模様には縁が無いらしい。しょんぼり帰って行った。

★オサムシに狂ったらしい山岸氏、今夏北海道でアイヌキン、オオルリ、オシマルリを採るんだと、今福井でトラップ修業に励んでいるが、「この調子だと北海道でも一杯採れるよ」だってさ。

★4月19日大島、嵯峨井、山本の3氏、福井へギフチョウの採集に行った帰り、下野谷氏宅を訪れたらしい。氏のコレクションは北陸随一との折り紙どおり、トリバネの展翅標本だけでも2千頭はあり、異常型のコレクションもフジオカをしのぐとさえ思える程だったらしい。さしもの嵯峨井氏も下野谷ショックに「すごい」「すごい」を連発。

★米沢の横山と言えど東北ではカミキリ屋で通っているらしいが、ここ金沢ではオサ屋という事になっている。ところが京都からはチョウ屋らしいとの情報も入った。そのうちゴミ屋、ブイブイ屋、ガタ屋との情報も入ってきそうである。とにかく氏は色々と精力的に手掛けている。

★どういう訳か、今年のギフチョウシーズンは何処へいってもシャッター音が乱れ飛んでいる。どうもスライトグループの同化作用が事のほか強くなっているらしい。そのうち「ラナイ計画」とか言って、会誌「採らない」を出せと言ってくるんじゃないだろうか。

★今年のギフチョウは平年よりかなり遅かったように思います。編集部でつかんでいるところでは、4月12日が初見のようです。さて、編集部では金沢付近のギフチョウ初見記録を集めて、今後の調査の用に供したいと思いますので、会員各位におかれましては、各年の最も早いギフチョウの目撃記録を編集部までお寄せ下さい。これを元に来年よりギフチョウ初見予想等を出したいと思います。ヨロシク

★井村氏言うところの「モルフォのようなマイマイ」を求めて、現在オサムシグループは熱い眼差しを上越地方へ向け、抜け駆けを繰り返しながら通いつめている。すでに「モルフォのようなマイマイ」はN氏、S氏の手中には収まっているものの、I氏は未だにとりあぐねている。

★4月29日松井、勝海、山本の3氏、なかよく長野方面へ採集に出掛けたが、いったい何を採りにいったやら。

★5月3日城南亭OPEN。海外遊びが過ぎて家を追い出された大島氏、最近チョコチョコ嵯峨井邸へ板前の出前に来ていたが、この程城南2丁目にお店を出した。うどん屋だかラーメン屋だか分からないが、とにかくお酒があり、たまり場がまた出来てしまった。

★5月3～4日吉村氏、白馬、戸隠、松本と長野県を家族旅行。ヒメシロチョウを採る。

★5月5日吉村、勝海の2氏、チャマダラセセリをねらって開田高原へ。時期が早すぎて、ヤマキチョウしか飛んでいなかった。同日野村氏、医王の里付近へギフチョウの調査。

★5月11日吉村氏、単独で再度開田高原へアタック。ところが雨だった。

★5月11日松井、中西、井村の3氏、雨が降るにもかかわらず中宮温泉へ。目当てのフタスジカタビロは時期が早すぎた為、オオチャイロに針路変更。ブナのウロに肩まで突っ込んでかき回したあげく、繭4コと終令1コを採ってきた。

★5月16日「ちょうたろう」こと西山保典氏来沢。大島氏の御好意により、城南亭にて酒宴を開く。東南アジア料理とラオチュウモドキに悪酔いしながらも、興味尽きない話に花が咲いた。富山からは山口氏もオンボロジープで駆け付け、にぎやかさに輪をかけた。

★フン虫とマイマイは1箱しか集めないと公言していた金子氏、最近標本が入りきらないとぼやいていたが、妙案があったとかで、ドイツ箱の2倍はある箱の製作に取り組んでいる。この調子でいくと来年あたりの箱はどんな大きさに成っているのだろうか？

★城南亭にトラップをかけると虫屋がかかるそうだ。日曜日の8時頃がピークらしい。

★5月17日山本氏、直海谷へミヤマカラスアゲハを採りに行ったらしいが、今年は少ないらしく、わずかに1ペアを採っただけ。ふて腐れているとき、カメラを抱えた竹谷氏がやってきたらしい。「コンニチハ、ヤマモトデス」

★5月18日吉村、勝海コンビ、姫川に沿って白馬から大綱方面へ。白馬ではシーズンにもかかわらずギフはほとんど見られず、アサマヤカシワの芽に潜むハヤシ、ウラジロの初令幼虫を観察したらいい。大綱では、ギフ、ヒメギフ双方の卵がウスバサイシンより見出され、両種の健在ぶりを確認した。

★5月18日松井氏ついにツルハシを持つ。ところが掘ったのはスネと首だった。便利な道具もシロウトが持つと凶器に変わる。同日、中西、井村の2氏はフタスジカタビロをねらって再び中宮温泉へ。ヤマシャクの花に4コもゴッソリ入っていたりして11exsを採集。ついでにサル FUN より FUN 虫3種も採ってきた。

★5月19日澤田氏、アオカタビロ欲しさに、中西氏のトラップのすぐ横にトラップをしかけていたが、2コ程入った模様。

★5月20日依然として白山市の瀬方面は通行止。「釈迦道をクロヒメが歩いている。行きたい行きたい、ああ」これ中西氏の大きなため息。

★5月27日赤いワーゲンに乗った金子氏、のんびり熊走で採集。快晴、頭上をそよぐ風もすがすがしく、独りウスバシロと楽しんだ。

★田中先生、日夜医王山方面にてギフチョウの生態調査に没頭している。新知見も色々ありフィールドへの足取りも軽快そのもの。調査を続ける為に、来年は医王山か俵かどちらかの小学校に移りたいと本気で考えている。

例会の記録

4月4日(金)城南管工2Fにて8時より開催。

新入会員を交えて自己紹介から始まる。新人の吉田、山本の両氏は越中むしの会にも所属していることから、百万石と越中の違いについて、何だかんだと話がでたが、越中は会員数の割に地元虫屋が少ない、というのが最大の違いであろう。

話はそのうちワイワイガヤガヤの情報交換の場となり、ミヤマカラスアゲハの話、来週はきっとオサムシを採るぞの話、ギフチョウ88ヶ所巡りから蝶研フィールドの話、誰その名刺はすごい話、あいつはイモだの話、イエローバンドがバンバンかえっている話、北海道のキラキラオサムシの話、今年のギフはいつごろ?等々が入り乱れた。終わり頃には酔っ払いが1人まぎれこみ、オサムシに見入っていた。

閉会は0時といつになくすんなり終わってしまった。以上出席者は、井村、大島こと井沢、勝海、嵯峨井、澤田、竹谷、松田、山本、吉田、吉村、中西夫妻の12名でした。

と ぶ	NO.57 1986年6月6日発行
編 集	松井正人
発 行	百万石蝶談会
事務局	金沢市大場町東871の15 松井方
	☎920-01 ☎0762-58-2727